No.7

東京大学医学教育国際協力研究センター

東京大学医学教育
国際協力研究センター

〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1
医学部総合中央館212
TEL 03-5841-3583
FAX 03-5802-1845

E-mail:ircme@m.u-tokyo.ac.jp
http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp

表題：海野溥山書

センター前の桜と東大病院新病棟を臨む

International Research Center for Medical Education

CONTENTS

◆第3回医学教育国際協力研究フォーラム ……2
センター長　加我　君孝
センター講師　水嶋　春朔

◆アフガニスタン保健医療基礎調査団分遣隊（医学教育）調査 ……3
センター助教授　大滝　純司
センター講師　水嶋　春朔

◆アフガニスタン復興支援（医学教育）研修 ……3
センター研究支援推進員　當山　紀子
センター講師　水嶋　春朔

◆第3回東京大学医学教育ワークショップ ……4
センター助教授　大滝　純司
センター研究機関研究員　若林　正

◆第23回 国内医科大学視察と討論の会 ……4
センター教授　北村　聖

◆Dr. Daniel Wolpaw（センター客員教授）紹介 ……5
センター助教授　大滝　純司

◆Dr. Daniel Wolpaw医学教育講義 "Reflections on Teaching" ……5
センター助教授　大滝　純司

◆Dr. Daniel Wolpaw「クリニカル・クラークシップでの学生指導のための研修会」 ……5
センター助教授　大滝　純司

◆Dr. Gordon L. Noel講演会「アメリカの医科大学での教育課題の変化」 ……6
センター助教授　大滝　純司

◆Dr. Reinhard Putz講演会「ドイツにおける医学教育改革」 ……6
医学部国際交流室講師　丸山　稔之

◆若井　晋教授　教育講演／客員研究員ミーティング ……6
センター助教授　大滝　純司

◆平成15年度センター・セミナー開催状況一覧 ……7

◆平成15年度リサーチ・カンファレンス開催状況一覧 ……7

◆センター日誌/編集後記 ……8

第3回 東京大学医学教育国際協力研究フォーラム

「アフガニスタンの医学教育支援の展開」開催報告

センター長　加我君孝
センター講師　水嶋春朔

アフガニスタンから招聘したGul Mohammad Tanin高等教育省局長（前列左から2人目）、Cheragh Ali Cheraghカブール医科大学長（同3人目）とフォーラム発表者

2003年12月11日（木）午後、医学部総合中央館333号室において、第3回東京大学医学教育国際協力研究フォーラム（主催：医学教育国際協力研究センター、共催：文部科学省、後援：独立行政法人国際協力機構（JICA））が開催された。

アフガニスタンは、世界でもっとも保健状況の劣悪な国のひとつであり、妊産婦死亡率1700/10万出生、乳児死亡率170/1000、栄養不良状態の子供の割合は40%前後と推定される。2002年1月に開催されたアフガニスタン復興支援東京国際会議（緒方貞子議長）において、わが国は積極的な支援を表明したことは周知の通りである。

保健医療者の教育も大切な課題であり、複数の関連施設による協調的な連携が必要不可欠である。8月には、「アフガニスタン保健医療基礎調査団分遣隊（医学教育）」（JICA）が組織され、当センターから2名の教官（大滝純司助教授（団長）、水嶋春朔講師）が派遣され、アフガニスタンの医学教育の現状の課題と今後の方向性などについての情報収集に携わった。

この度、アフガニスタン国から、医学教育の方向性を決める実質的な責任者であるGul Mohammad Tanin高等教育省学術調整局局長とCheragh Ali Cheraghカブール医科大学学長の2名をJICA研修員（2週間滞在）としてわが国に迎え、今後の医学教育の協調的な支援の可能性について有意義な討論をすることを目的として、本フォーラムが開催され、約60名の熱心な参加者が参集した。

開催にあたっては、行松泰弘氏（文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室室長）から、本フォーラムへの期待について、挨拶を頂戴した。

基調報告では、大滝助教授が「アフガニスタン保健医療基礎調査団　分遣隊（医学教育）調査報告」を報告した。タリバーン支配時代の10年間は、世界の医学の進歩から取り残され、現在、都市部と地方の医療者の質・量の偏在が大きく、地域の医療過疎地域で働ける総合医（General Practitioner）の養成が喫緊の課題であることなどが紹介された。

基調講演「アフガニスタンにおける医学教育の課題と日本の協力への期待」においては、Tanin局長とCheragh学長から、アフガニスタンにおける医学教育の課題と改革の方向性に関して報告があり、わが国に対する支援の期待が表明された。

シンポジウム「アフガニスタン医学教育協力コンソーシアムの展開」では、実際にアフガニスタンにおいて医療協力を展開している明石秀親医師（国立国際医療センター国際医療協力局支援官）、小林志保子看護師長（東大病院ICU病棟）から、アフガニスタンにおける医療の現状からみた医療者教育の課題について指摘があった。

またわが国においてユニークな医学教育を展開している東京女子医科大学の吉岡俊正教授（医学教育学）と自治医科大学の三瀬順一講師（地域医療学）からは、それぞれの大学の歴史、使命、卒前教育の特徴が紹介された。自治医大は、医療過疎地域（へき地）において地域保健医療の向上に実質的に貢献できるプライマリ・ケア医の育成を目指したユニークな大学で、アフガニスタンの医学教育の新しいカリキュラム編成におおいに参考になる内容であると、Cheragh Ali Cheragh学長からもコメントがあった。

最後に、JICA医療協力部の橋爪章次長から、「教育分野と保健医療分野の連携による医学教育協力の展開」について、発表があった。

総合討論では、保健医療当局と高等教育当局の意思の疎通、連携が、アフガニスタン国でもわが国でもまず大前提であること、その連携を有機的に形成して、アフガニスタンのニーズにあった支援をしていくことが重要であることが確認された。

最後に、加我君孝センター長より、アフガニスタンの医学教育支援の有効な展開に向けて、協調的な協力連携（コンソーシアム）を形成して、「顔のみえる貢献」「心の通う貢献」を進めていきたい旨の宣言が発表され、大きな拍手で閉幕した。

フロア風景

アフガニスタン保健医療基礎調査団分遣隊（医学教育）調査報告

センター助教授　大滝純司
センター講師　水嶋春朔

アフガニスタンは世界でもっとも保健状況の劣悪な国のひとつであり、妊産婦死亡率1700/10万出生、乳児死亡率170/1000、栄養不良状態の子供の割合は40%前後と推定される。我が国は2002年1月のアフガニスタン復興支援東京国際会議（議長：緒方貞子氏）においてむこう2年半に最大5億ドルの支援を表明した。教育分野の協力としては、5女子大学（お茶の水女子大学、奈良女子大学、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学）による女子教育支援、東京農業工業大学によるカブール大学農学部と工学部への支援が開始されて、成果をあげている。

保健医療分野では既に2002年8月及び2003年5月の基礎調査団が合意した4重点分野（保健行政強化、女性の健康、子供の健康及び結核を中心とした感染症対策）への協力を実施するにあたり、先方政府からは医療従事者の不足、不均衡な医療スタッフの配置等が問題点として上げられた。これを踏まえ、確固たる充実した保健医療体制を作り上げるためには医療従事者の養成を含む人材育成が急務であることが認識された。

文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室および国際協力事業団医療協力部から、医学教育分野における協力推進の要請が当センターに対してあり、2003年度に入って具体的な検討を進めた。8月には調査団（団長：大滝純司助教授、団員：水嶋春朔講師、原　智佐文部科学省国際協力政策室専門官、石島久裕国際協力事業団医療協力部Jr専門員）が、医学教育支援を行うための今後の協力方針策定に必要な情報の収集、及び先方政府の要請ニーズについて調査・検討を行うことを目的として派遣された。

1．調査期間

2003年8月5日～8月15日、カブール滞在期間　8月7日（木）～8月14日（木）

2．主な訪問先

高等教育省（Faez大臣）、教育省、保健省（Ferouz副大臣、Fahim局長）、カブール医科大学（Cheragh学長）、カブール大学（Popal学長）、WHOアフガニスタン事務所（Musa代表）ほか。

3．調査結果

カブール医科大学の学生数は一学年600人もあり、教員数、教材も不十分な環境で、旧ロシア方式の医学教育の質の改善が急務であった。また都市部と地方の医療者の偏在、女子医療者の不足、プライマリ・ケア医、総合医（GP）を養成するためのシステムの欠如、附属病院が内戦時代に破壊されたままであること、関連病院は専門医療に偏り総合病院がない、教員研修がないなどの問題点も明らかとなった。

2003年6月に「医学教育に関するワークショップ」（National Workshop on Medical Education in Afghanistan）が、カブール医科大学とWHOによって開催され、今後のアフガニスタンにおける医学教育の方向性に関する提案が集約された。

・学生数をアフガニスタンにおける医療者の必要数から制限する。（カブール医科大学は1学年100名とする。今年の入学生は101名。それまでは、1学年で400－650名ほど、6学年で3221名）
・卒前教育のカリキュラム開発を行う、
・医科大学の構造、機能のリハビリテーションを行う、

訪問先関係者から、わが国による医学教育支援に対して歓迎と期待が表明され、12月にはアフガニスタンの医学教育の責任者を招聘して、今後の具体的な協力推進方法を協議することが合意された。

アフガニスタン研修「医学教育」報告

センター研究支援推進員　當山紀子
センター講師　水嶋春朔

平成15年8月5日～15日に、国際協力事業団のアフガニスタン保健医療基礎調査団分遣隊（医学教育）（団長；大滝純司、団員；水嶋春朔、他）により実施された調査、及びその後の協議の結果、今後アフガニスタンの医学教育支援をすすめていく上で、平成15年度には短期研修受入を行なうことが決まった。

その計画を受け、平成15年12月1日（月）から12月13日（土）アフガニスタンの医学教育の方向性を決める実質的な責任者であるGul Mohammad Tanin高等教育省学術調整局局長とCheragh Ali Cheraghカブール医科大学学長の2名をJICA研修員として当センターに迎え、日本における医学教育の概要を理解し、日本の協力機関の関係者と共に今後の協力に関して協議することを目的とし、アフガニスタン研修「医学教育」を実施した。

以下の表のように、視察訪問では、東京大学をはじめ、自治医科大学、東京女子医科大学において、日本の大学医学部における卒前・卒後の医学教育システムを学び、神奈川県相模湖町国民健康保険診療所、神奈川県津久井保健福祉事務所においては、日本の地域医療と地域保健の連携に関した卒後研修を視察し、国立国際医療センターにおいては、日本のODAによるアフガニスタンに対する国際医療協力について講義を聞く機会を得た。また、米国からの客員教授（Daniel R. Wolpaw）により米国における医学教育に関する講義を受けた。

目的	訪問施設
1．日本政府における文部科学省の医学教育政策と制度を学ぶ	文部科学省
2．日本の大学医学部における卒前・卒後の医学教育システムを学ぶ	東京大学医学部（東京） 自治医科大学（栃木） 東京女子医科大学（東京）
3．地域の診療所、保健所における卒後研修を学ぶ	神奈川県相模湖町国民健康保険診療所 神奈川県津久井保健福祉事務所
4．国立国際医療センターのアフガニスタンにおける国際医療協力について学ぶ	国立国際医療センター国際医療協力局
5．アフガニスタンでの医学教育支援の展開について議論及び今後の計画を立てる。	東京大学医学教育国際協力研究センター

上記のような講義、視察訪問をもとに、12月11日に東京大学において、「アフガニスタンの医学教育支援の展開」をテーマとして、第3回医学教育国際協力研究フォーラムを行い、今後のアフガニスタンの医学教育支援に向けての協議を行った

左よりTanin局長、廣川東大医学部長、Cheragh学長

神奈川県相模湖町国民健康保険診療所にて

「第3回東京大学医学部医学教育ワークショップ」報告

センター助教授　大滝純司
センター研究機関研究員　若林　正

東京大学医学部の卒前教育の抜本的改革の一環として、Faculty Development（教員の資質開発）の中核と位置付けられている「東京大学医学部医学教育ワークショップ」の第3回目が、医学部教務委員会、医学部教育改革委員会、医学教育国際協力研究センターの共催により、湘南国際村センター（神奈川県三浦郡葉山町）にて、8月30～31日の2日間にわたって開催され、34名の先生方がご出席されました。

2000年8月の第1回ワークショップでは、参加者の教員自らが「問題解決型学習」を実践して、東京大学医学部の理念や目標、そして課題を明らかにし、カリキュラム改革の方向を探りました。2001年9月の第2回ワークショップでは、カリキュラム改革の重要課題の一つである、問題基盤型学習（PBL：Problem Based Learning）の導入について検討し、2002年度からの同カリキュラムの導入を実現しました。

これまで2回のワークショップは東大・ハーバードプログラムによる協力の下、外国人講師や他大学の講師の先生をお招きしてきたのですが、第3回目となる今回は、これまでのワークショップに参加されてこられた学内の先生方がタスクフォースとなって、卒前教育の現状や課題について活発な議論を重ねられました。その上で、「新しい医学教育を創る」という主題が設定され、「臨床診断学実習の教育効果の向上」および「PBL用の教材開発」を具体的な検討課題として、手作りのワークショップが築き上げられる運びとなりました。

こうして出来上がったプログラムは、グループワークとショートレクチャー、全体討論を有機的に組み合わせたユニークなものとなりました。グループワークでは4班に分かれてPBLの教材開発に取り組みました。当初は初めての参加で戸惑いを隠せなかった先生方も、ファシリテーターのサポートを受けながら議論を続けるうちに和やかな雰囲気となり、各班の中間報告でお互いに刺激を受けて、休憩を取るのも忘れて熱心に課題に取り組まれ、素晴らしいプロダクトを完成されました。

ショートレクチャーでは、グループワークの方法やPBLの紹介、東大医学部の教育の現状に始まり、公衆衛生学助教授の井上和男先生に前任校の自治医科大学のカリキュラムを紹介していただいたほか、教育学からみた医学教育について若林研究員が報告するなど、様々な視点から医学教育について見つめ直す機会が得られました。また、全体討論では臨床診断学実習の実際や、広く医学部のカリキュラムについて、忌憚のない意見交換がなされ、時間内には収拾がつかないほどに議論が盛り上がり、先生方の教育改革にかける情熱が伝わってきました。
さらに、今回は新たな試みとして、学外から4名の医学教育関係者にご参加いただき、新鮮な視点を提供していただいたことで、一層議論を深めることができました。

この場をお借りしてご参加いただいた先生方に改めて御礼を申し上げますとともに、今後とも医学部の教育改革にご尽力くださいますようお願い申し上げます。

第23回国内医科大学視察と討論の会

センター教授　北村　聖

全体会（鉄門記念講堂）の様子

医学教育振興財団主催の「第23回国内医科大学視察と討論の会」が平成15年9月4日（木）5日（金）の両日にわたって東京大学医学部で開催された。この会には主催校である東京大学を始め全国の国立・公立・私立大学医学部・医科大学から医学部長、教務委員長をはじめ、教育に関係する125名近い教員の方々が参加された。また、文部科学省から、小松弥生医学教育課長が参加された。この会は、毎年開催されており、私立と国立・公立がほぼ交互に主催校になっている。東京大学が主催するのは80年に一度のことであり、医学教育国際協力研究センターを中心に、教務委員会ならびに医学部事務の多くの方々とともに準備に当たり、活気に満ちた実り多い会となったと自負している。

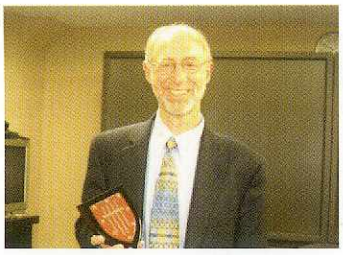
東京大学の医学教育はここ数年来大きな改革がなされ、その具体的内容を全国の教員の方々に見ていただくことができたと思っている。とくに学生による講義の評価（加我センター長）、カリキュラム改革（高本教務委員長）クリニカルクラークシップ（五十嵐小児科教授）、PBLによるメディカルヒューマニティの教育（北村）、PhD-MDコース（宮園分子病理学教授）については講演形式で詳しく説明した。一日目の夕方に行なわれた学生との討論も活発であり、東大医学部生の実情・真の姿を知ってもらえたものと信じている。二日目は廣川医学部長から「東京大学の医学教育の目指すもの」と題して研究者育成教育の具体例が示された。総合討論では、講演の内容以外にも、評価のフィードバック、教官教育などについても活発な討論がなされた。最後に、病院、臨床技能実習室、解剖学標本室などの施設見学を行い閉会とした。

この会の報告書は事務でまとめたものを、医学教育振興財団から発行していただいた。その中に参加者の感想が掲載されており、単なる感想のみならず東京大学の医学教育の問題点を指摘されたものも多くあった。

学生に対するヒアリングの様子

Dr. Daniel Wolpaw（センター客員教授）紹介

センター助教授　大滝純司



平成15年11月1日から3ヶ月間、東京大学医学教育国際協力研究センター客員教授としてDaniel R. Wolpaw（ウォルポー）先生が着任されました。

Wolpaw先生は米国オハイオ州クリーブランド出身で、良質の教養教育で知られるアマーストカレッジ（マサチューセッツ州）で英文学を専攻された後、ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部に進み、1977年に同校を卒業されました。その後は臨床医として、家庭医学（Family Practice）、救急医療、一般内科（General Internal Medicine）の3分野で研修を積まれ、それぞれの専門医資格を取得されています。

先生は20年以上にわたり、一貫して臨床教員（clinician educator）として活動しておられます。現在はケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部の内科助教授、クリーブランド・VAメディカルセンターの総合外来と救急外来の部長、そして内科副部長として、医学生や研修医の指導と診療に従事しておられます。最近は、学習の理念としてのreflection（省察）や、新たな学習方法として注目され始めているTeam Learningについて研究しながら、ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部の新たな医学教育カリキュラムの開発などに精力的に取り組んでおられます。当センターに着任以来、様々なFD（Faculty Development: 教育関係者のための、教育に関する開発的・研修的活動）に積極的に参加されると共に、東京大学医学部や他の医育機関の教育現場を視察され、豊富なご経験をもとに多くの意見やアドバイスをいただきました。

Dr. Daniel Wolpaw医学教育講義 “Reflections on Teaching”

センター助教授　大滝純司

ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部の内科助教授で、当センター客員教授（平成15年11月1日から3ヶ月間）のDaniel R. Wolpaw（ウォルポー）先生が、平成15年12月4日と平成16年1月20日の2回にわたり、“Reflections on Teaching”というテーマで医学教育連続講義を行いました。この講義の様子は、大学病院衛星医療情報ネットワーク（Medical Information Network by Communication Satellite for University Hospital: 通称MINCSミンクス）により、全国に放送されました。内容の概略を御紹介します。

なお、講義に使用されたスライドを当センターのホームページhttp://www.ircme.u-tokyo.ac.jp/から御覧になれます。

＜第1回　Reflections on Teaching-Exploring Complexity in Medical Education＞

学習者を中心に置いた教育を考える上で、教育というシステムを、複合的で有機的な機能のまとまり（complexity）であると捉えることが大切である。単純な（simple）システムとは、たとえばレシピどおり行う料理のようなものであり、また、単に複雑で込み入った（complicated）システムとは、たとえば宇宙ロケットの打ち上げのようなものである。教育にはこれらと大きく異なる点がある。つまり、すべてを予め詳細に計画することは困難で、結果は必ずしも予測できず、試行錯誤を伴い、一度上手くいったことが次にも成功するとは限らない。常に驚きや発見の連続である。この傾向は、特に成人型の教育で顕著になる。子どもに対する教育の特徴が未知の事実や事柄を理解させる（making the strange familiar）ことにあるのに対して、成人型教育の特徴は、既知の事実や事柄に対して新しい観点を持たせる（making the familiar strange）ことだからである。複雑系として教育を捉えた場合、教えるべき事項をただ網羅的に教えようとするだけでは不十分であり、教師側が何をすべきかを考えるだけでなく、学習者側に注目し、答えを教えるというよりも疑問を提示することが重要であり、教師も学習者も共に、自分やお互いの考えについて検討する（reflection：省察）ことが鍵になるだろう。

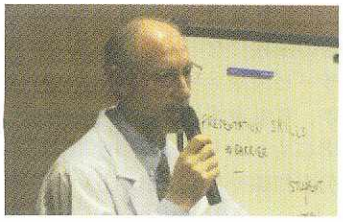
＜第2回　Reflections on Teaching-Tools for the Learning Relationship＞

ブルーム（Bloom, 1956）が提唱した教育目標の分類学（taxonomy of educational objectives）では、ただ単に知識を暗記するだけでなく、その知識を理解し応用し統合することが、より高レベルの能力であると位置づけられており、そうした高レベルの能力を訓練することで、知識を記憶し活用する能力を高められるとされている（Gagne 1970）。今回は、前回の講義で強調したように、学習者に自ら考えることを促す、学習者中心の教育を実践するための具体例や方策として、以下の事項について紹介した。

(1) 能動的な講義　(2) Team Learning
(3) プレゼンテーションの指導（SNAPPSモデル）
(4) 不確かなことについて検討する
(5) 学習者のポートフォリオ　(6) OSCE
(7) フィードバックに有用なRIMEモデル　など

Dr. Daniel Wolpaw「クリニカル・クラークシップでの学生指導のための研修会」

センター助教授　大滝純司



昨年度に引き続き、クリニカル・クラークシップに向けて、学生の指導に関する研修会を、医学部教務委員会と東大病院総合研修センターとの共催で実施しました。以下に内容を紹介します。

目　的：
(1) クリニカル・クラークシップで学生を直接指導する研修医等が、クリニカル・クラークシップの目的や目標を知る。
(2) クリニカル・クラークシップで学生を直接指導する研修医等が、臨床現場での指導のコツを身につける。

日　時：平成15年12月17日（水）14：30－16：00
平成15年12月18日（木）15：00－16：30
（同様の企画を2回実施）

場　所：東京大学医学部附属病院　入院棟15階　大会議室
参加者：臨床各科・部門の研修医や指導医(2日間で約40名)
内　容：
(1) クリニカル・クラークシップの概要と注意事項
講師　東京大学医学教育国際協力研究センター主任教授
東京大学医学部附属病院総合研修センター長
北村　聖　先生
(2) 指導と学習とフィードバックのためのワンポイントアドバイス（グループワークと講義）
講師　ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部内科助教授
東京大学医学教育国際協力研究センター客員教授
Daniel R. Wolpaw（ウォルポー）先生

Wolpaw教授の招聘にあたってインディアナ大学医学部のInui教授のご協力と野口医学研究所のご支援を頂きました。心より御礼申し上げます。

Dr. Gordon L. Noel 講演会「アメリカの医科大学での教育課程の変化」

センター助教授　大滝純司

平成13年度に当センターで客員教授として活動されたGordon L. Noel先生（オレゴン健康科学大学医学部教授）が、研究や出版の打ち合わせで来日されたのを機に、平成15年7月28日に、東京大学医学部総合中央館共通ゼミ室で、「アメリカの医科大学での教育課程の変化」というテーマで、講演をお願いすることができました。

講演では、アメリカの医科大学で生じている、以下のような多彩な変化について、多くの資料と共にお示しいただきました。

(1) 医学生の進路選択（進む診療科）の変化
(2) プライマリ・ケア分野の労働強化
(3) 診療科間の収入格差の拡大
(4) 医学生が学生時代にかかえる借金（学費ローン）の増加（10万～20万ドル）
(5) 診療に関する外部からの制限の増加

そして、日本の医学教育が今後直面するであろう課題についても以下のように提示されました。

(1) 各科専門医の人数制限
(2) 大学附属病院の教育機能に対する監査
(3) 研修医の労働時間の削減
(4) EBMを指導できる大学教員の養成
(5) EBMに必要なデータバンクの開発

Dr. Reinhard Putz 講演会「ドイツにおける医学教育改革」

医学部国際交流室講師　丸山稔之

9月10日（水）にMünchen大学副学長・医学部解剖学教授であるReinhard Putz先生が東京大学医学部を訪問されました。今回のご訪問の目的は、東京大学医学部とMünchen大学医学部との親睦を深め、今後相互にシンポジウムを開催するための予備的な話し合いを行うことでした。10日は廣川医学部長と会談の後、ご本人のご希望により、解剖学研究室（廣川先生ご案内）、病院地区（中央検査部、ICU、CCUなど）を見学され、その後「ドイツにおける医学教育改革」（後援：東京医学会）という題でご講演をされました。講演では、ドイツの医学部入試に触れられ、学生が資格試験に通ると、順番に（試験点数や、志願者倍率を配慮した上で）入学していくこと、1学年が700人と非常に多く、大学はその選考に関与できないことなどを話されました。またMünchen大学医学部はハーバード医科大学との間で学生交流協定があり、医学部教官の、医学教育への意識改革をはかるため、München近郊の湖畔の島にある大学施設において、年に1回、医学教育ワークショップをしているとのことでした。

若井晋教授　教育講演「国際協力に携わるとは」／客員研究員ミーティング

センター助教授　大滝純司

平成15年度の客員研究員ミーティングは、第3回医学教育国際協力研究フォーラム開催にあわせて、平成15年12月11日に東京大学医学部総合中央館310会議室で開催されました。学内および学外から13名の客員研究員の先生方にご参加いただきました。はじめに当センターの北村聖教授から、挨拶とセンターの活動状況について報告した後、各参加者から、自身の最近の研究活動や当センターへの提案などをお話いただきました。

つづいて、客員研究員のおひとりである若井晋教授（東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学）に教育講演（テーマ：国際協力に携わるとは ～医学教育分野で国際協力を進めるための基礎知識～）をしていただきました。

＜教育講演＞

若井先生に影響を与えた女性哲学者シモーヌ・ヴェーユの言葉の紹介からはじまり、心情倫理から責任倫理への転化、世界の富の偏在、子どもなどの弱者が貧困の犠牲になっている現状、医療を支える土台としての公衆衛生サービスや平和の重要性、先進国と途上国の間での命の値段の格差、軍需産業の問題、そして国際協力関連NGOの紹介まで、初心者にもわかり易くかつ明確に、国際協力に携わるために必要不可欠な知識や視点をお示しいただきました。

講演のあとには、参加者の間で活発な質疑や意見交換が行われました。なお、講義に使用されたスライドを当センターのホームページhttp://www.ircme.u-tokyo.ac.jp/からご覧になれます。

平成15年度　センター・セミナー開催状況一覧

	講師および演題	開催場所	開催日
1	大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） 「SGIM（アメリカの総合内科学会）での発表（当センターの紹介）及び学会の様子の報告」	医学部総合中央館310号室	2003.5.28
2	吉田素文（東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター助教授） 「基本的臨床技能の教育と評価における最近の話題」	医学部総合中央館310号室	2003.6.25
3	松村真司（松村医院院長） 「東京大学医学部附属病院における臨床クラークシップの評価研究」 水嶋春朔（医学教育国際協力研究センター講師） 「医学教育国際協力に関する人材データベース構築」 大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） 「OSCEでの合否判定基準の操作特性－卒業試験OSCEのデータについての検討－」	医学部総合中央館310号室	2003.7.23
4	大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） 水嶋春朔（医学教育国際協力研究センター講師） 「アフガニスタン医学教育視察の基調報告」	医学部総合中央館310号室	2003.9.24
5	若林正（医学教育国際協力研究センター研究機関研究員） 「教育学から見た日本の医学教育の現状」	医学部総合中央館310号室	2003.10.22
6	衛藤隆（東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース教授） 「子どもの事故防止からSafety Promotionへ」	医学部総合中央館310号室	2003.11.26
7	佐藤学（東京大学大学院教育学研究科学校教育開発学コース教授） 「専門家教育の課題」	医学部総合中央館333号室	2004.1.7
8	高橋都（東京大学大学院医学系研究科健康学習・教育学分野助手） 「癌患者の性を支える研修会」企画・実施・評価の試み	医学部総合中央館310号室	2004.3.3

平成15年度　リサーチ・カンファレンス開催状況一覧

	講師および演題	開催場所	開催日
1	大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） 「SGIM（アメリカの総合内科学会）での発表（当センターの紹介）及び学会の様子の報告」	医学教育国際協力研究センター	2003.5.9
2	大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） OSCEの妥当性の検討	医学部総合中央館共通ゼミ室	2003.6.13
3	高橋都（東京大学大学院医学系研究科健康学習・教育学分野） 「質的研究をどう教えるか：学部生を対象とした社会調査実習の試み」 山田牧（東京大学大学院医学系研究科健康学習・教育学分野） 「医師の日言語行動が患者に与える影響：一般女性による模擬診察場面ビデオの評価」	医学部総合中央館共通ゼミ室	2003.7.11
4	松村真司（松村医院院長） 「医療の質改善に関する小グループ教育とその効果」	医学部総合中央館共通ゼミ室	2003.9.12
5	大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） 「医学教育に対する非医療者の認識に関する研究」	医学教育国際協力研究センター	2003.10.10
6	松村真司（松村医院院長） 「プライマリケア・家庭医療の見学実習・研修を受け入れる診療所医師のネットワーク（PCFMネット）による診療所実習の評価」	医学部総合中央館共通ゼミ室	2003.11.14
7	板谷裕子（岐阜大学医学部医学教育開発研究センター非常勤講師） 「教育評価概説－初等から高等教育、医学教育へ－」	医学部総合中央館共通ゼミ室	2004.1.16
8	大滝純司（医学教育国際協力研究センター助教授） 東京大学におけるOSCEの事後評価	医学部総合中央館共通ゼミ室	2004.2.13

左より　酒井、水嶋、三浦、大滝、留田、ウォルポー客員教授、加我センター長、北村、田口、當山、松村、若林

センター日誌：2003年7月―2004年3月

■7月	28日	Dr. Gordon L. Noel講演会「アメリカでの医科大学での教育課程の変化」
■8月	7日～14日	アフガニスタン保健医療基礎調査団分遣隊（医学教育）派遣（大滝助教授・水嶋講師）
	30日～31日	第3回東京大学医学教育ワークショップ（神奈川県葉山町）
■9月	4日～5日	第23回国内医科大学視察と討論の会
	10日	Dr. Reinhard Putz講演会「ドイツにおける医学教育改革」
	23日	Dr. Duke E. Cameron講演会「Johns Hopkins Hospitalにおける医学教育について」
■11月	1日	ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部Daniel Wolpaw助教授 センター客員教授着任（～1月31日）
■12月	1日～13日	アフガニスタン医学教育研修員（JICA）2名受入
	4日	Daniel Wolpaw客員教授・医学教育講義（前編） "Reflections on Teaching-Exploring Complexity in Medical Education"
	11日	センター客員研究員ミーティング 若井晋教授講演「国際協力に携わるとは ～医学教育分野で国際協力を進めるための基礎知識～」 第3回医学教育国際協力研究フォーラム「アフガニスタンの医学教育支援の展開」
	17日～18日	クリニカル・クラークシップでの学生指導のための研修会
■1月	20日	Daniel Wolpaw客員教授・医学教育講義（後編） "Reflections on Teaching-Putting Skills and Knowledge to Work"
	28日	OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）実施
■2月	1日	イリノイ大学医学部Georges Bordage教授 センター客員教授着任（～7月31日）
■3月	24日	大滝純司助教授 平成15年度 東京大学医学部 The Best Teacher's Award・特別賞受賞（写真右）
■3月	25日	Georges Bordage客員教授 第1回MINCS講義 "Focusing on Critical Clinical Decisions: the Key Features Approach"

大滝純司助教授

編集後記●●●

ニュースレターの編集に取り掛かり始めた頃、センターはアフガニスタン国より研修員を受け入れている最中でした。そしてこの間、スタッフ一同団結し、お陰様で第3回医学教育国際協力研究フォーラムを成功させることができました。今年は暖冬のせいか、本号を発行するに至った今、センターの周りには春の花々が美しく咲いております。センターでは年間を通じて様々な行事を企画運営しております。医学教育や国際協力に関心のある方、写真を撮りたい方、お気軽にお立ち寄りください。(J)

発行元●●●

発　行　2004年3月31日
発行人　加我君孝
発行所　東京大学医学教育国際協力研究センター
〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1
TEL 03-5841-3583　FAX 03-5802-1845
印刷所　三美印刷株式会社